

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ドント・ルック・アップ

2021年/アメリカ映画
配給: Netflix/145分

2021 (令和3) 年 12 月 25 日鑑賞

シネ・リーブル梅田



2021-154

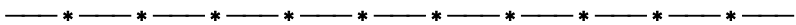
監督・脚本: アダム・マッケイ
出演: レオナルド・ディカプリオ/
ジェニファー・ローレンス/
ロブ・モーガン/ジョナ・ヒ
ル/マーク・ライランス/タ
イラー・ペリー/ティモシ
ー・シャラメ/ロン・パール
マン/アリアナ・グランデ/
スコット・メスカディ/ケイ
ト・ブランシェット/メリ
ル・ストリープ/ヒメーシ
ユ・パテル

👁️👁️ みどころ

巨大隕石、あるいは巨大彗星が地球に衝突したら？そんなパニック映画の代表が、日本では『日本沈没』（73年）（06年）、ハリウッドでは『ディープ・インパクト』（98年）、『アルマゲドン』（98年）だ。これらはいずれも人類の未来を考えさせる“シリアスもの”だが、Netflix が超有名俳優を総動員して作った最新作は？

衝突を回避するためには、彗星に核爆弾をぶつけて軌道修正を。そんな“正論”が通ったからヤレヤレと思っていると、後半の展開はアレレ、アレレ……。米国はこんな大統領でホントに大丈夫なの？

さらに、ラストはブラック・ユーモアとしか思えない、あっと驚く展開に。さて、その賛否は？



■□■ 巨大彗星が地球を直撃！そんな設定の直近作がコレ！ ■□■

巨大な彗星や隕石が地球に落下すれば？あるいは、気候変動等の要因で、地球に大地震、津波等の大災害が襲来すれば？そんな設定のパニック映画の代表は、日本なら『日本沈没』（73年）（06年）、ハリウッドなら『ディープ・インパクト』（98年）、『アルマゲドン』（98年）。また、その直近は『グリーンランド—地球最後の2日間—』（20年）（『シネマ49』56頁）だった。これは、サブタイトル通り「地球最後の2日間」を描く物語だったから、“ノアの箱舟”的要素と、スピード競争が際立っていた。

しかし、本作は天文学者のランドール・ミンディ博士（レオナルド・ディカプリオ）と、彼の助手を務めている大学院生のケイト・ディビアスキー（ジェニファー・ローレンス）が、地球に接近する彗星を発見するところから始まる本格的なディスタースタービオもの……。？巨大彗星の接近が『グリーンランド—地球最後の2日間—』の冒頭と同じように“世紀の

天体ショーの始まり”なら良かったが、彼らが何度計算しても、この彗星は半年後に地球を直撃するらしいから、こりゃ大変！

小松左京の不朽の名作『日本沈没』は小説も映画も大ヒットしたし、そのパロディ版たる『日本以外全部沈没』（06年）（『シネマ11』58頁）もメチャ面白かった。また、2021年版のテレビドラマも、移民計画を中国に広げたり、新型コロナウイルスまがいの感染症の広がりを描いたり、新しい工夫もあって結構面白かった。半年もあれば、何とか対策を立てられるはず。一方ではそんな考え方もあったが、そこでは、香川照之演じる田所博士は当初、狂人呼ばわりされるなど散々だった。しかし、ランドールたちの予言を聞いた米国大統領オーリアン（メルル・ストリープ）の“聞く力”は如何に？更に、その対応力は如何に？

■□■この天文学者は狂人！？大統領の聞く力は？■□■

大統領にはあらゆる情報が集約されてくるから、地球滅亡の予測もその一つに過ぎない。日本では、1260年に書いた「立正安国論」で蒙古襲来の危機を訴えた日蓮上人は鎌倉幕府から迫害されたが、1973年に出版された「ノストラダムスの大予言」は一世を風靡した。南海トラフ巨大地震、首都直下型大地震等の到来は科学的に間違いないが、さすがにそれだけで日本沈没、地球滅亡まではいかないはずだ。

他方、2016年のトランプ大統領の登場以来、“フェイクニュース”という問題が浮き彫りになった。また、近時の“何でも世論調査”という風潮の恐さは、本作のスクリーン上でオーリアン大統領が見せるさまざまな対応を見ればよくわかる。地球滅亡の危機という情報は、どのように扱えば自分の中間選挙に有利になるの？そんな視点ですべての物事を決められたのでは、国民は、いや地球全体の人間はたまったものではない。もっとも、科学技術を総動員して、巨大彗星に核爆弾をぶつけ、地球に向かってくる彗星の軌道を変更させるという正しいプロジェクトを選択し、それによって全国民の支持を得ようとする戦略は正しいものだった。ランドールも、今や親友（恋人？）になった、テレビの著名アナウンサーであるブリー・エヴァンティ（ケイト・ブランシェット）と共に、大喜びでその計画に協力していたが・・・。

■□■対抗手段は軌道の修正！？いやいや、それよりも・・・■□■

『日本以外全部沈没』は“パロディもの”だったが、『日本沈没』を含め、“ハリウッド発のディスターストピアもの”は、ほとんどが“シリアスもの”そりゃそうだろう。地球滅亡、人類滅亡というテーマをコメディやパロディとして扱うのは不謹慎というものだ。しかし、Netflix がレオナルド・ディカプリオ等の超有名俳優を多数起用して作った本作は、冒頭からコメディ風だし、オーリアン大統領の登場と共にその傾向がより顕著になってくる。そして、米国民支持の下に打ち上げられた、彗星にぶつけるべき核爆弾が途中からUターンしてくるストーリーになると、アレレ、これは一体ナニ？

ここから急遽登場してくる後半の主役は、巨大IT企業のCEO ピーター・イッシャーウ

エル（マーク・ライランス）だ。巨大彗星の中に、今世界でもはやされている貴重なレアアースが大量に含まれていることを発見したピーターは、それを米国が独占するべく、彗星を地球近くで爆発させて、太平洋上でレアアースを回収するという奇想天外なプロジェクトをオーストリア大統領とともに立案したようだが、さて・・・。

ちなみに、本作のタイトルになっている「ドント・ルック・アップ」は直訳すると「上を見るな！」だが、地球に近づいてくる巨大彗星の前に、それを唱えたのはピーター。アメリカの世論は二分され、「上を見ろ！」一派のデモも続いたが、巨大彗星から得られるレアアースに注目するピーター一派は「上を見るな！」と主張し続け、今日はいよいよオーストリア大統領と共に、そのプロジェクト決行の日だ。しかして、かつて坂本九が歌い、アメリカでも大ヒットした「上を向いて歩こう」を真っ向から否定した「上を見るな！」一派の思惑は如何に・・・？

■地球滅亡の日は来るの？その日アメリカ国民は？■

ラッセル・クロウ主演の『ノア 約束の舟』（14年）『シネマ33』196頁）では、巨大な「ノアの箱舟」内にあらゆる動物を収容したが、本作でも再三スクリーン上に地球上の生きとし生ける生物の姿が登場する。しかして、その意味は？また、イエス・キリストの一生では、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた「最後の晚餐」が有名だが、本作でも全くそれと同じ雰囲気です。ランドールたちが家族と共に集い、最後の晚餐を楽しむシーケンスが登場するので、それに注目！地球滅亡を控えた今、彼らの心境は如何に？そんな中、ピーターのプロジェクトの成否は？もしそれに成功すれば、地球は救われるうえ、米国は一躍世界一の大金持ちの国になるから万々歳！しかし、現実は何・・・？

他方、いつの時代でも、どんな危機でも、政権スタッフたち特権階級用の逃げ道は用意されているもの。本作を見ていると、それがよくわかる。たとえ、地球がバラバラに砕け散ったとしても、いち早く冷凍状態でロケットに乗って地球から脱出し、何万年後に人間が生きられる惑星に到達することができれば・・・？そんな物語が現実的なのかどうかはよくわからないが、コメディ（パロディ）のようなディスタopia映画なら、そんなシーケンスも可能・・・？しかして、本作のラストをあなたはどうみる？

2021（令和3）年12月27日記